先人の教育者・研究者の思いをつなぐ

愛知学院大学　特任教授
高　阪　利　美

【略歴】

1953年　愛知県生まれ
1974年　愛知学院大学歯科衛生士学院卒業
1982年　愛知学院大学短期大学卒業
2004年　佛教大学社会福祉学科卒業
2011年　愛知学院大学大学院歯学研究科博士課程修了
2012年　愛知学院大学短期大学部歯科衛生学科教授
2021年　愛知学院大学特任教授（現在に至る）

私は、愛知学院大学歯科衛生士学院を卒業と同時に母校の教員となり歯科衛生士教育に47年間にわたり従事してまいりました。

入職した当時1974年（昭和49）歯科衛生士の養成校は全国に87校、1年制の学校と2年制の学校が混在していました。その後日本の歯科医療の成長と共に1年に5～8校ずつ急増した時代を経て、現在は2022年度4月現在、176校中4年制大学13校、3年制短期大学16校、専修学校147校で専修学校が85％を占めています。

専門学校の教員でもあり、当時は研究とは程遠く、授業・実習・学生指導・臨床と専門職種の技術教育と指導に大変忙しい日々を送っていました。一方、歯科衛生士の教員の資質向上のために、全国歯科衛生士教育協議会が開催する、「夏季研修会」「歯科衛生士新任技術指導者講習会」「歯科衛生士専任教員講習会」「秋季研修会」など、教育内容の充実や専任教員の講習会や研修会が毎年開催され、私も毎年参加しました。特に、日本歯科衛生教育学会の前身である「秋季研修会」では、専任教員が全国から集まり研修を受けられ、意見を交わすことができる研修会として、1976年（昭和51）第1回の開催を皮切りに、100名以上の専任教員が一堂に集まり、研究発表がある年と研究発表はなく討論会やワークショップなどを行うこともありました。1985年（昭和60）からは1泊2日の日程で東京と京都の2会場を交代して開催することが定着し、座長を置いて発表を行う形になったのは1987年（昭和62）からでした。ここでは研究発表や、教育現場からの報告発表として、20題前後の発表と特別講演を設けており、私も学校代表として発表をさせていただきました。年々発表者数が増加し参加者も増え、教員同士のコミュニケーションの場となっていきました。また、学会同様に懇親会も催され、毎年親しい教員同士が再会を喜び、日常の情報を交換し合う場として、盛況な盛り上がりとなり、今思うと大変懐かしいひと時であり、ここでの会話が明日からの教育や指導に活力を与えてくれていたように思います。

その後2010年（平成22）に、全国歯科衛生士教育協議会開催の「歯科衛生士専任教員秋期学術

研修会」は「歯科衛生学教育の向上を目指すとともに、歯科衛生学の発展に寄与すること」を目的として日本歯科衛生教育学会として独立することとなりました。歯科衛生学教育研究の場として生まれ変わったのです。歯科衛生学教育研究のEBMの積み重ねを行うことにより、歯科衛生学の確立を目指すこととなりました。歯科衛生学を極め発展させるための学会が設立され、歯科衛生士教員の研究の場が整えられたことにより、歯科衛生学教育も今後歯科衛生士の業務拡大と共に成長する分野と捉えています。先人の方々により導いてくださった研究分野を、若い研究者の方々にとって今後も大いに発表する機会が増えたこと、大変喜ばしく思っています。

大学や短期大学が少ない中の歯科衛生学教育研究は、数が少ないように思われがちですが、誰もが研究者である認識を持つことが大切で、日常の学生教育の中に、臨床の現場の中に見いだせる課題が沢山あります。それを見つける喜び、さらにまとめる喜びとして、研究に臨んでいただきたいと思っています。自分の研究が社会においてどんな役割をもたらすのかを考えるとワクワクします。一つ一つの研究にはすべて意味があるのです。研究は社会を支え、人々の健康を支えることに繋がっていることを信じて臨んで頂きたいと心より願っております。